



中村俊定文庫
文庫 18
163



活記

耕作

沾石撰



五斗一海山田一丁白架
 世よささしや此魚たしよ
 舌乃耕字れ耕つきん
 抄極よりよりみしし
 きしににをぬこし
 冠里
 縮之ん人然てあす
 此之申とあまふ
 中し縮よりつる
 露沾



さあゆり此後といつく沖初舟
赤く一里おれみさよハ古洲
之りれ芝蔭申う穂屋出倉
高疑くま乃沸れあハ蘭臺
海さあやまてての二破之敵
わ~~~~~とつひー是を露貫
一村ハ残ふいなこれ孫子う如
竹是れわ~~~~~よハ 且雨

頭もや流す所ハや此後
いらさぬと歌録と一毎如高
句鞘乃物とやと之乃鶏糞粒
又他村もとと林車
福言や海より張舟の者
屯倉と~~~~~ハ羽伸
福来よ山猫競物晴るう那
是より色こつたう一人

一人此業ありく蘭相如
と可ぬ名はさひて又
九景江治石をく、
波乃垣る初年、
あしくも 序八徳

早稲

とわあはまふ板石、
まの入ハ三入邸のわは同ふ
沽石 沽徳

船村

稲むし如鬼の事終る
神樂屋の事終る
沽洲 園女

引板

音多一山、
おたしは海をぬき
格枝 菊脯

いさ舟

楳乃多如あき飯菜
いさ舟の舟也
専吟 岩翁

鳴子

たぐり坂の店より車ちあふく式 千山
伊豆相模宮へ川くむ鳴子うな 同波

弥六

役子おき柳田乃孫六浄遷宮 浮生
五斗後の胸を揺るく孫六うな 朱馬

たぐり木

出来秋おやや麻宮のぼの木が 百里
胸をくくは乾け乾を長きか如 喬谷

小次郎

小次郎わ末乃九日の強うな 堤亭
星きろ水を熊谷小乃柳 牧士

春法

一種よの湯きうゆ々のお摺川 南浦
んせよ福妻めく乾辛苦粒 入松

山那草

福きよ神良達も片つゝさうと 千江
いさくよお娘き祖父おんうな 海宇

紙

稼穡乃辛苦多し是れ耕一擺六あり
は是て人の力を助ふるも牛馬は
力をばさうくせぬ者なれしなり
あまて和を脱却をあらはは力
くをばさぬあそむあといへる具も
出来まきの皆機事なりて限り
あまうしは綺羅の人の一向
は是れいふくぬるなり

志いねく老乃児傍の二律風

白雲

富人の志いなき長一猿翁

睡足

五

加藤の者

いふ老や梅の舞臺より神はる

貞佐

うま程の蟹も御あはははは福

堵岩

いな負

梅負ハ漸色親真中をすまふ

活葉

いな負や梅のい子坂かへ乾坂

巨川

安山子

明皇年あつてはの加一うま

晉如

繩強やいし一は比企はるやまり

發中

鹿火

ふかき鹿火の光^諸をみれば

鹿の尻の火の光^{ヒツキ}をみれば

櫓

七つをみれば一歌をむつちう那

刈株へみちる首乃毛く共

神取

燕乃^(歸)神の澄きと^{斗格}のまかな

まはれこれ櫓妻よりとと左のうを

以奈世道

流れり小田や穂あまの女中す

おむきお君よりうへに穂利ろ

新米

ぬの片くや峰乃傘とて母米

櫛の歯や既く伊勢の初儀

越んこめ

やふ米や猿が背若く先を吐

焼くややせよ寝るより肉のけし

古連 琴風

風葉 詞言

周竹 只尺

伊左垣

和名水なる松の尾く出で登るる丸
我兄
飯代乃日和のよと殿や端の垣
甘谷

糰子

糰子を借りもちこみ珠り又里北粒
湖十

新蓮や井せよわらうる梓乃香
虎月

新藁

新りもやを付多新娘むうへ
五水

神殿よ是跡ぬえとあとも甘果
蓮子

糰子

うゆね乃う新りききるり不神の秋
京 仙鶴

神厚やさるるさるるぬ岸くめ
青嶽

落穂

小野り皆々り帯り文字りけさるり落穂り
京 掉歌

隠りま字り馬りあうりの浦り落穂
湖光

稲之枕

いありらりやありはりるり種り京り廿り卯
京 氷花

秋蔵りと壽り乃字りの大り工りありあり
秋色

空言の秘をそそあきまをひら
奥郷

鎌カマ

今とそ如研で隠念林仕事
相江

竹師フルヒ

強ゆる小千石とを竹師一あ時を
消石

物牛

かこまよ乃今此やまはよ三秘多を
文鳳

仙

芳子饒と塚中の仙菊の上
沾徳

勝ハ歌り丸を柑此株
沾石

沈月もまゝ其也の影壁に
沾淵

雨をそくくは海にたすは
又魚

あゝのふらとそろあふうを法脚
清流

端と端やあを風長ぬ
楓江

川より犬を尋ねてあそぶ也 沾池
 空より去りてあそぶ也 沾池
 加を祢宜の何を伸すも重なる 柳江
 切らまじり強りあそぶも松 杉江
 片らと色鳥帽子を扇は其悦楽 沾石
 地蔵乃の縁はあそぶ所のあ 文魚
 春のちいさなあそぶも打たぬ 杉江
 膠船の町に小あそぶも栗片く 沾池

片馬をとりせぬもあそぶ小池 一い 喜派
 あそぶもあそぶもあそぶもあそぶも 又英
 思ふはあそぶもあそぶもあそぶも 沾石
 娘のあそぶもあそぶもあそぶも 杉江
 初物もあそぶもあそぶもあそぶも 沾池
 茶里もあそぶもあそぶもあそぶも 執子

名をあらぬさうらうは
 合欽事此行司よあう
 々々七をわくくあ
 びり胸細換股をい
 川てふひなきちう
 甲申極あうくく
 依惟ああけ
 けり人くく
 昔袖を執らんを

白合独吟

沽石

十二

相持の要付

初目

結
肩を

服
引拵

関
反り

二目

車
か

日
おけ拵

日
おき拵

三日

弦
四子つし
指原む

狐
鼠とさ
反つ事

冥
小まの
大あし

四日

日
河津外
はるま枝

日
屋くら
竹る

日
折込
丸たあま

五日

日
あむし
あやめ

日
鏡ひねり
りおし

日
かたがゆ
わたり

た 肩すし

万葉や油くちけぬ丸木橋

七 以木廻し

共より持てて寝ぬを喰らふつ牛あふ

たを我いふかあまを引
ちり 丸木こしあまの
油たぬしそち
たハサを枕の運連
ま勝とるやなをたなま
をよはし

此川橋

横長の尾より押し流れる葉のな

右むら

念くむ子ね旅をいつきと

横長の川をささるわはつと
ふつとさあけくむ根や
花子乃かきさくふま
一胡とよつとさよま
まらぬくひるん

十

左ろ

牛乃角いばよの尻梅のつん

右ろ

二人明て初くさき浦園掉れ音

無は縁をそあもハサの
クヤそあんわの昔
二人縁のおを中も抱
さわのつかはねハ講
いあへんし

左車

空^{カラ}車 伊勢の御殿に松の月

右や丸紙

うま松の乾きもこの 万葉集

賣家とのやま松の月を

まのまの竹園の涼

のこりきりきりきりきり

心はりの 侍らん

右毛の巻

ゆく洞乃きけりし 陣は木葉が

右あけの巻

川はけれおはよきおはやく男命を

ひくあまの川を

二葉のくけり

持とヤ

左 芭蕉云

山乃ゆけて勝喜のちるむ

女 はたけ

高橋のうり目上強いさうてん

舟の子ぬききくくくく
あふみきくくくく
つふちくくくくくく
橋よいとく

左 四の川し

九月廿二日 船のふりかへし 片よ

女 指片云

橋立やまじくくくく 乃野う

たやまのくくくく
たけくくくく
海を二つよあ
くくくくくく

左 瓜とま

はちまものや其^ソか^タう^タぬ^タ五月^ノ節

右 ぼつぎ

きき^しに^し初^めの^しは^らし

立^とろ^ろと^ろ乃^乃一^魚

も^もあれ^とは^はい^と

山^山下^下飛^飛鳴^鳴の^のう^う

左 小ま

肩^肩を^をぬ^ぬま^まみ^みり^りの^の虫^虫

右 大綱

御^御ま^まあ^あの^の大^大綱^綱

た^た井^井の^の戯^戯ま^まは^はい^い

あ^あの^のあ^あの^のあ^あ

う^うの^のあ^あの^のあ^あ

あ^あの^のあ^あの^のあ^あ

く^くの^のあ^あの^のあ^あ

さ 河津のま

つゝ 壺を伝ふておち 葛の桶

右 梅子ちぎ

免也とのみ 熊沢とあゝ 鶴の啼

河津熊澤時代

ふつとくも 梅とふ

——

左 やがら

語、燕乃々 けさる 矢そ 芝のあ

右 竹三

こ 好果の何乃 切 賣 買 姑 三 三

おもむきとけぬ 矢りや

右え、う 梅 三 三

合よ 何れきき 三 三

れくく

た 打也

白雲孤山の跡之於心、のな

右 九龍寺

ク命よわ之寸海世世蓮乃玉

為菜水上の香るるを

よるれと旧地より立

ふりわさる踊海とる

丸のち 一

左 ね通

餘りある常我を深升乃出つさか

右 志やま

きんま心志やくり魂や謀乃新

致はあしとら一白と

目

たはまけ

左 綴るなり

ほつきに陣をきく一老乃飯

大 加考れと志

唐と馬と爪と毒へくろのよろ

杖持たす

はてしなく

右 かけろ

右 下籠中志

袴着の心やのねむろし

右 籠へ

雪といつて分別なれやう終哉

親乃合をぬくろし

新まの志のこころハ

白く分るる

なまこと

左む川一正題を
ついでと考ふ

ひのり

判者

法徳

源氏

星家也入可く家多相鏡

存令

沼ぬ御幸表多のく

法石

小女部を那馬よ伝くや居あん

法徳

心計と朝少の物や平目と

心成

沈月と海ちとあまよれ斗方なき

法州

若くは傳ふくはるる錢別

法系

夕
 夕之く鬼乃耳はあけ拍
 昔少口説く文彦の心助
 かく枕公家の隣に車引
 友の別して女遣之の
 裡山の横よりよき花頂山
 字は別り顔よりをなし
 一物乃甚ゆ不四時よりうら
 何や〜まるとりわ〜小抄理海守

弱形〜夕中〜控ふ合おれお
 和巾の境際けりあ〜
 月影をあふた〜重乃松丸右
 帯仕了〜留ふ音の隅
 年しと申す海〜ま秘音家
 索〜〜〜事脱いりゆのな
 御音自悦ち〜〜平屋也
 古主歌年〜海ふ案内
 山夕
 流葉
 冬令
 貞佐
 秋色
 海
 治治

神のまゝ懸るるに地はを 和雅
 細工上より乃 言出まると産 法酒
 光陰をまゝとるるに却も 四夕
 後まゝなればあゝぬ菱川 吉流
 水をかた不具あゝの執行も 沾石
 倚子にのりても向ふ山なり 又魚
 まゝかゝる栗よ入影あゝの月 香為
 世をうゝ一糸余はふ不契ゝと 柳江

うらゝつと枝を去しよわ鼻乃穴 白雲
 せれ一町おのきをふりゆる 柳江
 鯉一献とまを打つとほゝいてま 香為
 荒神 候いさゝけ 香為
 小関越 法谷あゝの待たるれ 香為
 重乃日のあやまきりかな 又鼻
 好く色水序はな成そや致あし 和雅
 鳥を掃くゝおサ敷の標よりく 沾石

物々ぞ子取付しきく兄方の 沾葉
 南乃の船より一舟なれりてそ 山文
 黙然と坐する人の大世火 沾徳
 國を渡る舟すまじり成とし 貞徳
 しの舟を降りて舟を老の坂 沾叶
 人目つゝそわきんをくの池 清流
 優婆塞の耳を唐の松乃聲 暗室
 毛のつゝそせぬ軒子吉氷 沾葉

相控もる扱ん〜と扉てぬま 沾石
 猫乃入舟をうき歌神月 香令
 欠落のり敷と〜と聖如網 又忠
 風を舟の男をわらう〜と 和桂
 紀人の跡も穢ぬ東山 山夕
 腐まき儒のま〜と舟をきき 沾徳
 いのんも舟りの節〜と舟節 畜有
 空子稲田の舟すまじり 沾叶

針と糸をあやを拂ははくし髪 春令
たさくおき作よせはる晴言 晴言
あつこのうはくしんを花の風 花名
胡弓打可兜中 松葉掛 白佐
とさほぬ乃字ハまけて花の心 山夕
又燕をん 禱 秋 一 羅人 法葉

くさけ 糸名の目水左 鼓 研 赤て耕作
乃 役わるとあり 農具をれくの御
はくせしせ ぬ 稲 ち 日 初 ち 兼 白
弦 音 子 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
五穀 産 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
七 町 目 山 石 河 岸 ち 積 ち 一 稲 ち ち
名 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
と 法 海 龍 中 ち ち 成 て 也

跋

こゝ百六十ある石天地至清の
と来をうきも来田一反より
固くよ志よ猶姑をゆるし
猶くは撫くみ法き乃よ自
あゆむちくく法石の何あは
くさるあはく田能をあらあ

一巻の奇形をのての千八手
を百もく費しむつは集ま
るのぬあれをひくを、正元根
うううし海眼をたのしむる
深くはほくたのくきしある
まのの壬辰九月

鹿崎舟言者

青流

昭和十四年六月二十三日
字校合了 俊定藏
原本 松宇文库

吉田宇右衛門 版

